

つた様子をしてゐたのではないかと思ふのである」(「風土の北と南」。こうした文言は、藤岡の著書に「愛すべき山川の懷に涵養せられたるわが国民は、永く薫育の恩を忘れずして自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の変遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし」といい、勅撰和歌集の四季・恋の部立の最も重んじられたことや、この時代から盛んになった季節によく調和する歌合や合奏など遊樂に觸れて「自然を愛する国民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、また一は千年以前の祖先が深く四季折々の景色に愉悅せし結果なりといはざるべからず」と述べていたことと照応するといえよう。平安文学と向き合うことは、私たちが育み、私たちが抱かれている日本文化の歴史、美意識の伝統の淵源に分け入ること、すなわち私たち自身を見きわめることにもなる。

私たちが先輩諸氏によつて拓かれた平安文学への道を歩むにあたっては、なお探求し解明すべき多くの問題を抱えている。研究の成果を得ることは、さらに明らかにすべき問題を掘り起こすことでもあるからである。多数の研究者諸氏により寄せられた斬新な報告の集成である本書は、紫式部学会の主要事業である『古代文学論叢』の編集・刊行、年刊誌『むらさき』の発行のために、年末格別の助力を惜しまれなかつた武蔵野書院の創立九十周年記念事業の一環として企画され、刊行されたのである。紫式部学会の当事者であることをもつて編者たるの光榮を享受することを悦びとする。

平成二十一年 十二月八日

編者 秋 山 虔

目 次

卷頭言……………編者 秋山 虔 i

I 総説 文学史研究のために

平安文学史開扉……………秋山 虔 3

文体の成立……………鈴木日出男 15

——文学史のために——

平安朝文学史の試み……………藤原 克己 41

——「あくがるる心」をめぐる——

II 絢爛たる散文の展開

1 古物語の諸相

『竹取物語』の心とことば……………高田 祐彦 61

長編物語の誕生……………	室城 秀之	81
——うつほ物語——		
住吉物語……………	三角 洋一	99
——嵯峨野の野遊びの段の考察——		
<b>2 歌物語の伝統</b>		
伊勢物語「初冠」考……………	山本 登朗	123
大和物語……………	工藤 重矩	143
——撰集と物語の間で——		
<b>3 源氏物語</b>		
源氏物語の達成……………	増田 繁夫	163
源氏物語……………	池田 和臣	183
——文学伝統（文学情況・文学精神）との対峙——		
<b>4 後期物語から中世へ</b>		
狭衣物語の位相……………	久下 裕利	201
——物語と史実と——		
浜松中納言物語の視点……………	中西 健治	227
——「はらから」の物語——		
『寝覚』の風貌……………	横井 孝	243
——「源氏以後」の世界へ——		
平安物語から中世物語へ……………	辛島 正雄	265
——短編物語の位相——		
<b>5 日記・随筆の流れ</b>		
蜻蛉日記の和歌と表現続稿……………	小町谷照彦	285
——道綱母と藤原兼家の贈答歌を支える歌ことば——		
『和泉式部日記』の饒舌な文（ふみ）……………	川村 裕子	309
——「童遅参事件」と宮の文をめぐって——		
王朝日記文学と東三条院南院・冷泉院御在所南院……………	倉田 実	333
——敦道親王邸への仮説——		
今めかしき後の宮……………	藤本 宗利	353
——定子後宮の気風をめぐって——		

6 歴史物語の始発

『栄花物語』『大鏡』の時代区分意識……………福長 進 377

女たちの、歴史叙述……………加藤 静子 393

——『栄花物語』正篇倫子腹の子女たちの描き方から——

7 説話の時代

説話の時代……………森 正人 417

III 平安和歌の歴史

1 勅撰集——和歌史の構築——

『古今和歌集』の文学史……………鈴木 宏子 441

『拾遺和歌集』の成立……………近藤みゆき 463

——勅撰和歌集における王権・政権と和歌の問題として——

題詠と表現……………浅田 徹 485

——金葉集の時代——

2 私家集——三十六人集の世界——

歌仙家集本・三十六人集の本文展開試論……………藤田 洋治 509

——陽明文庫蔵(サ・六八)本兼盛集から——

私家集研究の現在……………平野由紀子 533

3 和歌と資料

異本資料としての古筆切……………田中 登 557

——三代集を例に——

本文データベースの一問題点と異本研究の可能性……………久保木秀夫 583

——古今集の異本歌・異文を例として——

4 歌人研究

秀歌撰と百人一首……………井上 宗雄 601

貫之創始の和歌表現……………新藤 協三 615

古今集にみる僧止遍昭……………武田 早苗 635

IV 真名の世界

1 漢詩文

平安時代の詩序に関する覚書……………佐藤 道生 657

白河尚歯会記考……………	後藤 昭雄	681
2 歴史・記録からの照射		
古記録と源氏物語……………	山中 裕	703
古記録と仮名日記……………	高橋 秀樹	727
V 資料編 (解題・翻刻)		
鶴見大学図書館蔵『源氏注品小鏡』解題・翻刻……………	高田 信敬	751
京都大学文学研究科図書館蔵「俊頼卿口傳」解題・翻刻……………	伊倉 史人	831
執筆者略歴……………		899
英文タイトル……………		908

平安文学史論考

## 平安文学史開扉

秋 山 虔

かつて国風暗黒時代とも命名された、唐風全盛の時期があった。凌雲集（八一四）、文華秀麗集（八一八）、経国集（八二七）の勅撰三集が相継いで成立した九世紀前半期、嵯峨天皇（在位八〇九〜八二三）、上皇位八二三〜八四二）の君臨した時期である。

桓武天皇（在位七八一〜八〇六）による長岡京建設の挫折を経て、永遠の平安への祈りをこめて出発した平安京は、当初必ずしも平安の都ではありえなかった。その造都事業と東国経営による国帑の疲弊から延暦二四年（八〇五）、翌年の天皇崩御に先立って造宮職は廃止されるに至った。

桓武朝を継ぐ短期の平城朝（八〇六〜八〇九）は、嵯峨朝に取って代わられるが、まもなく経験することになったのは平城上皇側との二所朝廷の緊張関係であり、この宮廷争乱の克服あってこそ、というよりは克服すべき要請あってというべきだろうが、儒教的礼文主義、あるいは文章経国思想にもとづく君臣和楽の文遊が政治的实践としての意義を担うことになったといえよう。神泉苑への行幸の場における、交野・河陽の離宮ほかへの遊幸の場における作文の営みは、まさに「国ヲ経メ家ヲ治ムルニ文ヨリ善キハナク、身ヲ立テ名ヲ揚グルニ学ヨリ尚キハナシ」（『日本後紀』